

豊かな学びをめざす戦術

先月はW杯で、今は高校野球で甲子園をめざす、熱い戦いが連日行われています。戦術について解説者が熱く語るのを聞いていると、選手たちはさまざまな状況のなかでどう動き加点するか、戦術を練り、練習を重ねていたのだろうなと思います。

さて、この戦術を練るということを学校現場も毎日しています。舞台は小学校の図書館です。学校図書館はいろいろな授業で使われ、学校司書が先生方とともに、子どもたちの主体的な学びをどうつくるか、と戦術を練ります。

小学校2年生の教科書には、『スイミー』という小さな黒い魚のお話があります。長年教科書に掲載されてきた物語なので、ご存じの方もおられるでしょう。スイミーは、兄弟が大きなマグロに襲われますが、小さな魚の仲間たちと協力して、大きな魚を形づくるように泳ぐことを考えつきます。天敵のマグロは、スイミーたちの巨大な魚の姿を見て逃げ出すのです。

先生から、「子どもたちが『スイミー』の学習をした後に他の物語を読ませたいので本を用意してほしい」と、学校司書に依頼がありました。子どもたちに、物語には起承転結の展開があって、こうした構造があるからこそおもしろいんだということを気づかせようというのです。そして、子どもたちが多様な本からそれぞれに起承転結があることを読み取り、「おもしろいな」と思った本を紹介するという授業したいとのことでした。

この授業のために私は、図書館の絵本をできるかぎり読み直しました。子どもたちが起承転結の構造に気づくような、どの子も自然に読み進むことができるような、先生が意図するイメージを描いてあるような本を選び出すのです。準備した本が子どもの学びを左右します。的確な本でなければ、授業は成立しません。なんども提示する本を選び直し、先生と授業プランを考え合いました。

これだという本、50冊あまりを用意して、授業本番をむかえました。子どもたちは「私はこっちの本が好き」「このお話は終わり方がはっきりしている」など、次々に読破して物語の構造を読み解いていました。どの子も自分に合った本を選び出すことが楽しそうでした。

今、子どもたちにはすすんで読む・調べる力が求められています。それには、読み方や調べ方を学んで、「読んでみたいな」という意欲を持って読み解く経験を重ねることが大切です。学校図書館は、先生方のいろいろな要望に丁寧に、的確に応える働きをすることで、活用されています。それは、いつでも学校司書がいて、必要とされる本や情報を伝える専門の仕事をしているからです。一校一名配置されている学校司書として、子どもと本との出会いをつくり、手渡した本が豊かな学びにつながるような仕事を、これからも大切にしていこうと思っています。(F)